

私学の魂

聖ドミニコ学園中学高等学校

在校生・保護者との心のつながりと温かさをベースに 自然体で生徒の成長を促し、後押しをしてくれる カトリック系女子校が「21stCEO」への加盟をバネに インターナショナル・アカデミックの2コース制を導入!

2018年からの「21stCEO (21世紀型教育機構)」への加盟を契機に、翌2019年4月からは、インターナショナルコースとアカデミックコースという2コース制を新たに導入し、創立時からの伝統であるカトリック系の小規模で家族的な女子校の温かな教育が、一段と進化に向かった聖ドミニコ学園中学高等学校。先進的な学びのスタイルと新たな入試、破格の英語教育によって、いま女子校のなかでも注目される存在となった同校の教育の様子を、今回はカリキュラムマネージャーの石川一郎先生と、広報ご担当で英語科の田畑朝先生にお話を聞かせていただきました。



カリキュラムマネージャーの石川一郎先生



広報ご担当(英語科)の田畑朝先生

DATA

1

聖ドミニコ学園中学高等学校

- 沿革 1931 (昭和 6) 年 聖ドミニコ女子修道会の5人の修道女が来日。仙台に修道院を設立。
1950 (昭和 25) 年 10月、東京都目黒区駒場に修道院設立。
1954 (昭和 29) 年 6月、学校法人聖ドミニコ学園設置認可。
1958 (昭和 33) 年 7月、カトリック池尻教会より聖イメルダ幼稚園の経営を継承。
1962 (昭和 37) 年 4月、目黒区駒場に中学校・高等学校を開校。幼稚園を聖ドミニコ学園幼稚園と改称。
1962 (昭和 37) 年 9月、世田谷区岡本の現在地に全学園・修道院を移転。
1989 (平成 元) 年 6月、創立35周年記念感謝ミサ。
1994 (平成 6) 年 3月、聖堂・カタリナ棟落成。6月、創立40周年記念式典・感謝ミサ。
2000 (平成 12) 年 12月、新校舎落成。
2004 (平成 16) 年 6月、創立50周年記念式典・感謝ミサ。
2009 (平成 21) 年 6月、創立55周年記念感謝ミサ
2014 (平成 26) 年 6月、創立60周年記念式典・感謝ミサ。
2018 (平成 30) 年 9月、「21stCEO (21世紀型教育機構)」加盟。
2019 (令和 元) 年 4月、インターナショナルコース・アカデミックコース開設。6月、創立65周年記念式典・感謝ミサ。

校長 高橋 幸子

所在地 〒157-0076 東京都世田谷区岡本 1-10-1
TEL : 03-3700-0017
<https://www.dominic.ed.jp/highschool/>

交通 東急田園都市線「用賀駅」より徒歩15分。東急田園都市線・大井町線「二子玉川駅」より徒歩20分。
成城学園前～都立大学駅北口行き《都立01》バス「岡本一丁目」下車5分。二子玉川駅～玉川病院・成育医療研究センター行き《玉31》バス「岡本もみじが丘」下車2分。二子玉川駅前よりタクシー約5分。

インターナショナルコースと アカデミックコースという、 2コース制を2019年から導入！

聖ドミニコ学園中学高等学校へ取材に訪れた10月半ば、初めにインターナショナルコースの中学2年生の、英語イマージョンによる理科（生物）の授業を見せていただきました。

2019年4月から同校に設置されたインターナショナルコースとアカデミックコースという2コース制を導入したことが、それまでも家族的な面倒見の良い、聖ドミニコ学園中高の温かな教育に、さらなる進化への弾みをつけました。聖ドミニコ学園の“新しい学び”のスタートといっても良いでしょう。

教室に入ると、ネイティブと日本人の二人の先生によるチームティーチングの形で、リズムよく生徒にレクチャーと質問が重ねられているところでした。

インターナショナルコースの第1期生にあたる、この日の出席者16名の生徒は、次々と投げられるネイティブの先生からの英語での質問に対して、臆せず自然に思い思いの発言をしていきます。その生徒たちの発言を、また先生がリズムよくキャッチして、コメントを返してくれます。

ときには仲間どうしで相談したり、意見を言い合ったりして、その時々質問への答えや意見を、次々と言い合って授業が進んでいきます。

同校の広報ご担当で英語科の田畑 朝（たばた とも）先生に聞いてみると、このインターナショナルコースの生徒は、英語イマージョンで行われる英語・数学・理科の授業を合わせると、中学1年次から何と週14時間の英語の授業を受けているといいます。私立中の英語の平均的授業時間数が6～7時間であることを考えると、生徒たちが英語に触れている時間数は、倍以上になります。

もともとこの日本でも、ミッションスクールといわれるキリスト教系の私立中高には、英語に力を入れてきた学校が数多くありました。明治期に日本の英語教育の草分けとなったのは、その当時に国内に開校した数々のミッションスクールでしたから、それも当然のことといえるでしょう。聖ドミニコ学園でも、同様に英語教育には力を入れてきました。

すでにこの聖ドミニコ学園では、このインターナショナルコースの新設によって、英語・数学・理科の授業を「英語イマージョン（英語に浸る）による他教科の学び」で行うことで、英語の力を飛躍的に伸ばす教育をすでに実現しています。まだ導入から2年目の過渡



人体について学んでいたインターナショナルコース中2理科の英語イマージョン授業。

期とはいえ、ネイティブの先生からの英語の投げかけに対し、まったく臆せず、間違いを怖がることなく、この授業で学ぶ人体の仕組みについて、自然体で英語のキャッチボールが行われていることが、教室内の雰囲気を楽しく和やかなものになっています。

「いまでは先生も生徒も、かなりこうした授業の形に慣れてきたようです。先ほどの授業ではインプットの場面が多かったですが、後でアウトプットすることが前提ということを生徒も理解しているので、それにつながるような意識で知識を吸収していたところ」と、2018年から同校のカリキュラムマネージャーとして招聘された石川一郎先生が教えてくれました。

授業の始めのうちは、意外と大人しいかな？と感じたのは、生徒が真剣にインプットしている場面だったからなのかもしれません。

ただ、授業が進んでいくと、生徒の発言もどんどん活発になり、生徒どうしのやり取りも、先生が促したわけでもないのに、自由に発言が交わされ、ときに笑いや歓声が教室に沸き起こります。こんなふう楽しく主体的に学ぶことができれば、きっと英語そのものや、英語で学ぶ他教科が好きになり、いっそう英語力も高まるのでは、と思わされる授業風景でした。

進化のきっかけとなった 「21stCEO (21世紀型教育機構)」への 2018年からの加盟！

1931（昭和6）年に聖ドミニコ女子修道会の5人の修道女が来日して仙台に修道院を設立。その後、1962（昭和37）年4月、目黒区駒場に中学校・高等学校を開校。以来、カトリック系の小規模で家族的な女子校として、親身で面倒見の良い教育を受け継いできた聖ドミニコ学園中学高等学校が、この1～2年で急速な進化を遂げてきたのは、2018年に



聖ドミニコ学園の6年間の学びと通して得られる力

「21stCEO (21世紀型教育機構)」に加盟したことが、大きなきっかけだったといいます。

そして翌2019年4月からは、現在2期生まで入学しているインターナショナルコース(以下・インターと表記)とアカデミックコース(以下・アカデミックと表記)の2コース制を導入したことで、同校の「新しい学び」のスタイルが、徐々に全校に浸透していきました。

現在も同校のカリキュラム・マネージャーを務める石川一郎先生は、「21stCEO」を立ち上げた発起人の一人であり、理事でもあります。『2020年の大学入試問題』、『2020年の教師問題』という教育関係ではベストセラーとなった著書を持つ、いわば21世紀型教育の伝道師ともいえる役割も果たしてきた先生です。

石川先生は毎回の説明会でも冒頭に、「なぜいま、こうした学びが必要なのか?」を保護者に話しているそうですが、やはりこの1~2年の間に、保護者の反応も変わってきたといいます。

「今回のコロナ禍が、教育や入試の変化を後押ししたという側面が確かにあると思います。緊急事態宣言や外出自粛・休校要請によって、ふだん当たり前のようになっていた学校に登校できない期間があり、保護者も在宅で仕事をせざるを得ない状況が生まれたときに、それでも学びを止めないよう、在宅でも仕事が進められるように社会全体が何とか工夫をして、現在に至っているわけですね。こうした状況は、いまの小学生はもちろん、保護者の世代も初めて経験したことです。

これはまさに、これからの教育の課題となっている『未知なる状況に対応する力』が求められている状況です。『正解がひとつに定まらない問い』が、コロナウイルスによって人類に投げかけられたといっても良いかもしれません」と石川先生は現状を俯瞰します。

「聖ドミニコ学園中高の在校生も、休校要請された3

月~5月にはオンラインでの授業をはじめとした学校活動を行い、休校期間が終えた6月からは分散登校となりました。学年やクラスを割ることなく、今日は中1と中3と高2とか、そうした形を取りました。月・水・金に登校したら、火・木はオンラインで授業を受けるといった形にしていました」と田畑先生。

「3月はちょうど試験の時期でしたが、その後の補習期間にあたる時期からは個々の先生がオンラインで各家庭の生徒に対応を始めていました。ただ、3月いっぱいには中高全体でオンライン授業を行うところまではいきませんでした。

その後、4月から準備を始めて、5月から学校全体でオンライン授業を実施しました。それまでも本校では、ICT教育に力を入れてきたことから、生徒も教員も日常的にiPadを活用していましたが、校内の授業でのiPadの使い方と在宅の生徒とリモートで行う授業の使い方はまた違うということに気づき、ICT委員の教員が中心となってオンラインでのiPadの使い方や授業の手法の研修を専任教員、非常勤教員全員に対して5~6回リモートで行い、小テストのやり方や動画の撮り方、動画以外の双方向のやり取りの仕方などを共有して個々のスキルを高め、4月後半からホームルームと授業を徐々に開始しました。5月初旬からは教員全員がオンライン授業をスタートさせました」と田畑先生は振り返ります。

自然体で英語イマージョン授業に臨み、聞き取りで困らない力を身に着け次は英語表現の力を育てる!

昨年から新たに設置された新しい2コースの第1期生は2年目を迎えた矢先に、また今年の第2期生は入学直前に、コロナ禍によって登校できない3か月間を過ごすことになったわけですが、インターとアカデミックの2コース制の導入と、そこでの新しい学びについて、これまでの手応えはどうなのでしょう。

「先ほどご覧いただいた授業のように、英語で理科を学ぶときにも、ネイティブの先生の自然なスピードの英語に生徒がかなり慣れてきたと思います」と、ご自身も海外帰国生だったという石川先生は感じています。

「ときには日本語を使うこともありますが、少なくともネイティブの英語を聞き取ることにについては、生徒が困ることはほとんどなくなっています」と英語科でもある田畑先生も口を揃えます。

「ネイティブと日本人の先生によるチームティーチングのやり方のバランスがかなり良くなっていると感じます。お互いの役割と発言のタイミングがうまくかみ



身近な食べ物を題材に行われていた国際コース中1英語のイメージ授業。

合って、生徒もそれに慣れてきました」と石川先生。

「もうひとつ、授業の組み立てに教員も生徒も慣れてきたことも手応えのひとつです。毎回の授業では最初に大きな問い(=ビッグクエスチョン)が投げかけられ、授業中には個々の質問(=トピック)が重ねられるというネイティブの先生による授業構成に、日本人の先生も生徒も慣れてきて、その流れに自然に対応できるようになってきました。

最初の頃の生徒は英語も不確かで、いきなりの問いかけにも『何のことだろう?』という戸惑いがあったように思いますが、いまはこのペースに馴染んできました」という石川先生の感想に、田畑先生も頷きます。

「生徒も廊下や教室に掲示されている生徒作品をふだんから目にしていますので、やがてそうした形でアウトプットする必要があることを想定したうえで、インプットにも取り組んでいる様子です。最初の頃と比べると、前向きにメモを取り、他の教科でも無理なく「PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)」に取り組めるようになっていると感じています」と田畑先生。

「ただ、授業でご覧いただいたように、生徒は英語を聞きとることに慣れてきていても、まだアウトプットがスラスラとできるわけではありません。英語が自分の耳に入ってきて、それに対して自分の考えを発言しようとしたときに思わず日本語が出てしまったりしていますが、まずはそれでもかまいませんし、それは今後の課題です。まずは自然体で授業に臨めることができるようになっていくことを、私たち教員も感じられることが嬉しいですね」と田畑先生は言います。

本日の授業に出席していたのは、国際コース第1期生にあたる中2の16名(在籍17名のうち1人は欠席)でしたが、見ていても本当に自然体で授業に臨んでいる様子が見え取れました。

この時間、チームティーチングで入っていた理科の河野先生はほとんど日本語を使わなかったように見受けられましたが…。

「数学や理科の先生は1年以上、英語科の教員やネイティブの先生と多くのミーティングをしてきました。どこまで日本語を使って、ネイティブの先生と生徒のやり取りにどの程度入っていけば良いのか…など。その話し合いも英語ですのですが、いまではむしろ英語で話す方が自然になっていたりします」と田畑先生は笑顔で話してくれました。

「困ったときには理科の河野先生が日本語で助けてくれることを生徒は分かっていますし、ネイティブのリチャード先生がとこところ『これは日本語では何と言うの?』と河野先生に投げかけてくれるので、安心して授業に臨めるようになっていきます」と田畑先生。

リチャード先生は、フィリピンで理科を学び、日本の国際国際スクールで教えてきた経験のある先生だそうです。キビキビとテンポの良い授業は、見ていても楽しく、生徒の気持ちを惹きつけて、モチベーションを高めてくれるように感じました。

長い目で生徒を見守っていけば、必ず英語の力は伸びることを信じて余裕をもって大らかな学びを促す!

「リチャード先生は、低学年の子どもたちを、ある程度英語のできる子とこれから学ぶ子を一緒に教えた経験もある先生なので、最初は英語力に大きな差がある生徒でも、4年くらいあればほとんど差がなくなることを知っています。だからこそ短いスパンで生徒の成長を見るのではなく、長い目で見ればきちんと力がつくということをいつも強調されています」と田畑先生。それで日本人の先生方も生徒の成長を信じていくことができ安心したと言います。

「私たち教員も保護者も、つい早く答えを求めたくなりますよね。そうではなく、長い目で生徒の成長を見守ることが必要なことを、私たちも教わりました。

最近来ていただいた、英語を教えるネイティブの先生は、英語を正しく教えるのが上手で、生徒の間違いを正すスタイルだったのですが、以前から英語のディレクターを務める別のネイティブの先生が、そうではないんだよとカリキュラム・ビルディングの会議でスタンスを共有して、教員どうして学んでいるところで」と田畑先生。

カリキュラム・ビルディング会議とは、いつ頃から重ねられているのでしょうか?

「昨年2コース制がスタートしてからは、毎週の教員

の時間割のなかに組み込んであります。また、コース制導入初年度から着任するネイティブの先生には、その半年前からこの会議に参加してもらい、日本人教員と一緒にカリキュラムを構築していただきました」と田畑先生。

今日見せていただいた理科の他にも、数学、英語の授業ではネイティブの先生、日本人の先生で共同作成したカリキュラムに基づき「英語イメージン授業」がチームティーチングで行われているということです。

それにしても、英語イメージンで行われる英語・数学・理科の授業時間数を足すと、週に14時間も英語で授業を受けているということに驚かされます。

「ちょうどすべての授業時間の4割程度にあたります。一日のうちに2～3時間、英語で学んでいることになります。それくらい英語に触れていると、中学1年から高校1年次までに2,000時間英語を学ぶことになります。そうすると、1年間海外に留学した場合と同じくらいに該当します。4年間でそこまでやると、1年留学と同じくらい英語力を向上させられるという仮説に立って、このカリキュラムを構築しました」と石川先生。

このインターナショナルコースに入学してくる生徒は、そういう学びを希望した子どもたちであったとしても、大変なボリュームです。入学時は英語学習への意欲が高かったとしても、実際に授業を受けてみたら、これはちょっと厳しいかな…、と感じてしまう生徒もいるのでしょうか。

「生徒がギブアップしたケースはまだありません。インターは英語既習者のコースですと説明会でお伝えしていますが、実際は2科4科入試でも入れることから、入学時点で英語レベルが少々心配な生徒もいました。最初のうちは聞いたことをカタカナで書いていたり…。

でも徐々に英語でメモを取れるようになってきています。また、聞いたことをそのまま声に出したり、繰り返し使われる言葉を文脈の中で覚えていったりすることで、より英語圏の子どもの近い形で学んでいるように感じます(笑)。そのような生徒たちの成長を実感している担当教諭は、もう大丈夫と言っています。そして生徒たち自身も学びそのものが楽しいようで『ドミニコで良かった』と言ってくれています。」と田畑先生。

中2の第1期生や中1の第2期生のなかには、帰国生もいるのでしょうか。

「インター生は中1、中2それぞれ17名ずついますが、そのうち帰国生は2名ずつです」と田畑先生。ということは、ほとんどが国内で過ごしてきた生徒が、このインターでの学びのなかで大きく英語力を伸ばしていることになります。

思考コードの「C軸(創造)」の力を育てる、授業と問いの組み立てのなかでアウトプットとGROWTH MINDSETを!

この新しい2コース制の、もうひとつのアカデミックコースの在籍生徒数はいま何名でしょうか。

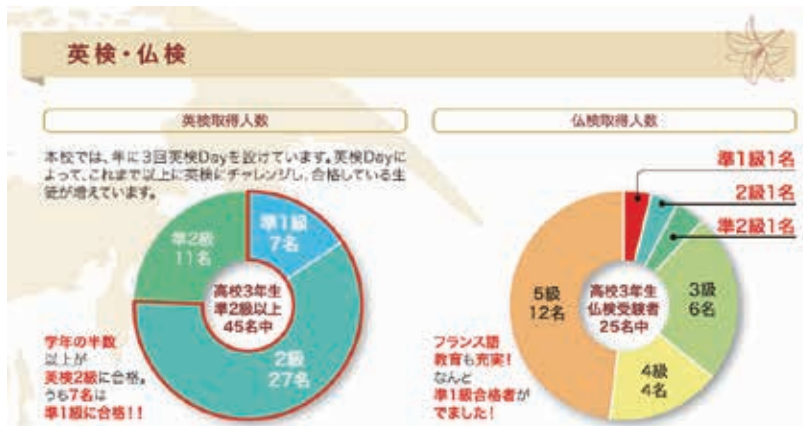
「アカデミックは、中2が47名、中1が39名です」と田畑先生。

インターナショナルコースを設置したことで、アカデミックコースを含む学園全体の学びにも良い意味での変化や影響があったのでしょうか。

「先生方には学年をコースで区別するのはよさそうという考えがあり、週に1回の『ドミニコ学』という授業は学年全体で行っています。そこでも、それまでの本校とは少しやり方を変えて、21世紀型教育の学びの手法で、少し引いた立ち位置から生徒の自発的な学び

を促す方法をネイティブの先生方が実践しているのを見て、先生方間でその学びの手法を共有できるようになっています」と石川先生。

取材の途中で見せていただいた校舎の廊下には、生徒のアウトプットである作品が所狭しとばかり掲示されていますが、そこにはところどころ「GROWTH MINDSET(成長する心)」という、ネイティブの先生からの



高い合格率の英検・仏検の合格状況。

メッセージが書かれ、「失敗を怖がらずに、中高生時代に色々なことにチャレンジしてみよう！」という新たな空気が学園に満ちているように感じられました。

「私が最も変化を感じているのは、発表をしたり、自分の考えを表現することが、生徒の間では苦ではなくなっていて、そこにユニークな工夫まで加える生徒が増えているということです。いろいろな教科で発表することが多くなっていて、またドミニコ学では調べたことに基づいて準備をして話せることで、聞いてもらえる喜びも感じているのではないかと思います」と田畑先生は生徒の変化に目を向けています。

今日の授業では、少しインプットの場面が多かったように感じましたが…、

「授業のパターンが決まっているんですね。最初にテーマを説明し、最後に発表がある。今日はそのネタ入れの時間が中心でした」と石川先生。

「たとえばディクテーションの授業でも、最初に大きなテーマがあって、たとえばエコというテーマで、最終的には『自分のエコハウスを提案しよう!』という課題で、それに向かって生徒が組み立てやすいように、インプットをさせ、やがて発表に結びつけ、さらにテストに出るという流れになっています」と田畑先生。

「思考コードにたとえて言うならば、A軸（知識・理解）とB軸（論理・応用）の間くらいの問いが最初にあって、やがてはC軸（批判・創造）のクリエイティブなところまで行く問いが最初から立てられているのです。B軸までで終わらないように…。最終的には個々の制作物でそれを表現するという流れです」と石川先生が説明してくれました。

なるほど、その流れは分かりやすいですね。

「生徒どうし、仲間の制作物を廊下で見て共有していますし、個々の作品を作る制作の過程でも、互いに見たり話し合ったりしていますので、理解が深まり、より創造的な制作物をつくるために生かせるようになっていきます」と石川先生は言います。

「ひと言でいうと、そういう学びは楽しいと思いますよ!」と石川先生は、ご自身が21世紀型教育に関わってきたご経験も踏まえて、笑顔で話してくれました。

「言葉より始めに体験、体得することが多いですね。アカデミックコースでは、日本語であれば分かったり、漢字で理解できることでも、英語ではすぐに理解ができなかったりしますが、最初は英単語が分からなくても、あまり気にしない雰囲気ができつつあります」と石川先生も田畑先生も共通して言います。

「インターコースを希望する入学者の中にはコツコツと努力する真面目な生徒もいるのですが、そうした良い意味で真面目なタイプの生徒は、一方で自分の殻を



廊下の生徒作品と、ネイティブの先生からの「GROWTH MINDSET」のメッセージ

破るのに少し苦勞する面もあります。最初のうちはコツコツと努力して、知らない単語はないように準備して授業に取り組むのですが、そのうち、このペースではもたないかなと感じてきて、細かいところにとらわれすぎず、大きく捉えて課題に取り組むようになってきています。」と田畑先生。

「図や動画なども使って、視覚で理解した後に言葉が乗ってくるという流れなので、子どもたちにも分かりやすいと思いますよ」と石川先生。

高2くらいからは、抽象的な概念なども学んでいくことになると思います。

「そこからは大変ですよ。最後まで英語で学んでいくのかどうかは微妙なところですよ」と石川先生。

「高2からはどうしても大学受験のために文系と理系に分かれるので、インターナショナルコースの生徒がアカデミックコースの生徒と一緒に学んでいく形になります。ただし英語は、6年間、最後までネイティブの教員が受け持つことになります」と田畑先生は現時点での見通しを教えてくださいました。

人類が向かい合ったコロナ禍をも契機に、自分の頭で考え、最適な解を導き出す力を「21世紀型教育」のもとで育てる!

聖ドミニコ学園中学校が、今年の説明会で強調してきたことはどういうことでしょうか。

「21世紀型教育の話をもっているのですが、コロナ禍になって、これからの教育のあり方が問われるようになり、保護者も聖ドミニコ学園の教育と、今後求められる教育のあり方がマッチしていることや、先生が生徒に教え込むやり方ではなく、生徒自身に考えさせるというやり方に賛同してくれる保護者が増えていくように感じます。思考力入試や英語入試の話も、

関心を持って聞いてくれている保護者が増えています。わりと自然に『これからの時代はこういう教育が必要ですよね』と言ってくれる保護者もいます」と石川先生。

「今回の外出自粛期間に家でニュースに目を向けると、海外の各国でもコロナ禍への対応は様々に異なり、何が正解なのか答えの定まらない状況を、いまの小学生もまざまざと目にしてきたわけですよね。そのなかで、『いま何が必要なのか自分の頭で考えること』の大切さを、子どもたちも保護者も痛切に感じたと思います。

そうした初めて経験する状況のなかで、社会全体も変わるもの、変えざるを得ないものと、変わらない、変えたくないものが交錯する世の中になったときに、当然ながら学校や教育も、これからのあり方を考える必要に迫られたというべきでしょうか。

本校の21世紀型教育のなかで育てようとしている力は、こうした状況にも対応できる力であり、家族や友人、先生や仲間と一緒に、ひいては社会全体で知恵を出し合って、最適解を導き出していける力です」と石川先生は強調します。

今年の説明会の参加者の反応として印象に残っていることは何かあるのでしょうか。

「インターナショナルコースの認知度は高まったかなと思います。それでも希望者はさほど多い人数ではないのですが、少しずつ手応えは増えていますね。

先日実施した入試体験会では、英語入試に10名、思考力入試に7名の小学生が参加してくれました」と田畑先生。さらに、

「1学期にも後半に、インターナショナルコースの理科の授業を体験する会にも、これまで最多の参加者があり、とくに帰国生が多かったです。もちろんコロナ対策で人数を限った予約制なのですが、とても意欲ある

受験生が多かったと体験講座を受け持った先生からは聞いています。インターの学びに関心を持ってくれる受験生は確実に増えている気がします」と言います。

「この2



学年全員で取り組む「ドミニコ学」では作業を通して体感・体得する学びが行われる

年間そうした学びを実践してきていますから、その点は大きいですよね。コース制の導入前には『これからそうした学びをします』と伝えてきましたが、まだ実態はありませんでしたので…。こうした体験ができる機会に参加してもらえると、本校の新たな学びを実感してもらえると思います」と石川先生。

「そうした授業体験の評判などが、聖ドミニコ学園小学校のコミュニティーや友達のなかでも広まっているように思います。ですので、昨年、一昨年よりも人気度が少し上がっているように感じています」と田畑先生。

今年ではコロナ禍で、各私学の入試広報を担当する先生方はどこも大変だったと思いますが、そうした状況下でも、良い手応えがあるようです。

「休校期間に行われたオンラインのリモート授業も、見せてもらうと質が高まっていたと思います。急いで操作方法も研修こそしましたが、もともと今日の授業のような学びを重ねてきましたので、在宅でのリモート授業でも、生徒たちも先生も、そのスピリットや手法、生徒が自分たちで調べる習慣などは、双方向でよくできていたと思います。他校とは違った次元の双方向授業になっていたように思います」と石川先生は、この2年間の実践の成果を感じています。

聖ドミニコ学園の「PBL(課題解決型学習)」は、オンラインでのリモート授業でも可能な私学のなかでも高いステージの学びへ!

「私も他の先生の授業の自習監督に入った日があったのですが、オンライン上で指示が出て、生徒はそのメッセージをiPadで読み、そしてごく自然に、しかもとても楽しそうにグループワークに入っていく姿を見ることができました。在宅から担当の先生も、生徒の様子を見ていてくれて、本校のPBLはリモートでも面白い

■より高次のレベルの思考をめざします



聖ドミニコ学園の「PBL(課題解決型学習)」ではより高次のレベルをめざす!

なと思いました」と田畑先生。

「また音楽の授業では、登校再開してもまだ、歌うことができませんよね。でも先日、見に行ったら、生徒が一人ひとり自分のiPadに向かって何か黙々とやっていました。教科書の曲をiPadのガレージバンドというソフトを使って実際の音に起こすという作業でした。コードを入力し、好きな楽器を選んでドラムやベースなどのパートごとの音を重ね、楽曲がどのように作られるのかを学びます。そして最後に自宅で歌って曲を完成させるのだそうです。これは見ていて本当に楽しかったですね。できた曲を聞かせてもらおうと、それぞれ違った雰囲気曲の曲に聞こえるんですよね」と田畑先生。

「これこそ創造領域の力を育てる『C軸思考』ですよ。ガレージバンドというソフトはコロナ禍になる前から使っていて、作曲などもしていましたので…。

ですから、コロナになって、確かに不自由ではあるけれど、そのなかでもできる違った楽しみを見つけて、前向きに学んでいることは確かだと思います」と石川先生。

ふだんの教室ではあまり積極的に発言しないタイプの生徒が、リモートの授業では自分の考えを積極的に伝えてくれたりという、オンライン授業ならではの良い面も、多くの学校から聞きました。

「ご指摘の通りだと思います。オンラインでの対応も、朝のお祈りから入ることで、気持ちがりフレッシュされて、ホームルームでは生徒の顔が間近で見られることも、かえて良かった面があると思います。また、こういう困った状況のなかでは、宗教というバックボーンがあることも、生徒や保護者にとっての心の拠りどころや安心材料になったのではないかと思います」と石川先生は感じています。

確かに、外出自粛によってストレスを溜めがちな期間に、学校や先生、友達とのつながりや、見守られて



聖ドミニコ学園では全教科の授業でPBLが実践されている

いるという安心感を得られたことが、多くの生徒の家庭では喜ばれたようです。保護者へのアンケートでも、学校とのつながりを感じられたことがありがたかったという回答が目立ちました。

■ドミニコ学の学び



成長と共に広がっていく視点

週1回の「ドミニコ学」の授業は学年全員で行われる

「確かに授業をすることが今回のオンライン対応の目的ではなく、在宅の生徒とのつながりを保っていくことが、本質的な目的なのだなと感じていました。目的は同じでも工夫の仕方はさまざまで、各先生の個性が生かされていてドミニコらしくて良かったです」と田畑先生。登校再開後にも、保護者との面談はオンラインで行ってほしいという要望が多くありました。

「そういう意味では、今後コロナ禍が去った後にも、対面とオンラインの両方の対応があって良いと思えますし、ふだんから先生と生徒、家庭との精神的な距離感が近いカトリック校ならではの互いの信頼関係と、ICT教育に力を入れてきた本校ならではの教育スタイルの両面を生かして、今後もハイブリッドな対応をしていけると思えます」と石川先生は手応えを語ります。

オンラインでPBL的な授業まで可能にしている学校は、私立中高でもまだ少ないように思えます。その意味でも、カトリックの小規模で家族的な女子校であることと、21世紀型教育の学びのスタイルを導入～実践して、全教科でPBLを行ってきたこと、ICT活用に力を入れてきたことが、このコロナ禍でもうまくかみ合っており、印象を受けます。

ひと昔前には、大学合格実績のマニフェストとか、どこまで成果を伸ばすかということが注目された時期がありましたが、これだけ不確定な社会情勢が続くと、何かもっと確かな、心のつながりや温かさ、安心感が求められるようになってきていると感じます。

「温かさを感じられることは、いまはとても大事だと思います。小規模な女子校で、しかもミッションスクールの良さはそこにあると思います」という石川先生の言葉が、聖ドミニコ学園の教育の揺るがぬ軸を表しているように思えます。